活動報告

豊岡演劇祭に関する活動報告：
変容するフリンジ

河村竜也

An activity report of Toyooka Theater Festival:
Transforming fringes

KAWAMURA Tatsuya

（2022年3月4日受付，2022年9月30日発行）

はじめに

スコットランドの首都エジンバラで開催されるエジンバラ・フェスティバル・フリンジに代表されるようにパフォーミングアートのフェスティバルには通称「フリンジ」と呼ばれる参加形態が存在する。フリンジは「周辺の、辺境の」と訳されるように、フェスティバルにおけるフリンジは、中央の周辺でいわば衛星的に存在しているものということができるだろう。例えば、フランスのアヴィニヨン・フェスティバルも同様で、「IN」と呼ばれる中心的なフェスティバルがあり、その周辺で「OFF」と呼ばれるフリンジ型のフェスティバルが行われている。いわば公式に対する非公式、本流に対する傍流と呼ぶことができるかもしれない。

アヴィニヨンOFFは、近年においては1000以上のアーティストが世界中から上演をしに集まり、その数は年々増加傾向にある。その背景には、いくつかの理由が考えられるが、フリンジの一般的特徴である自由登録参加型というものが要因として挙げられるだろう。登録料を支払い、上演会場さえ確保できれば、およそ誰でも参加をすることができる。その自主性に委ねられた参加形態であるがゆえ、世界中から鎬を削りにアーティストが集まってくるのである。

本稿では、そのような一般的なフリンジの形態を背景に、豊岡演劇祭におけるフリンジがどのような特徴をもって企画運営が行われてきたか、演劇祭立ち上げ期からプロデューサーを務めてきた立場からその概観を報告する。

なお、共同執筆をした研究ノート「演劇祭来場者の動機と回遊行動に関する概観：開催地内の回遊性向上を目指して」においては、主にフリンジの回遊性向上のための取り組みについて記述した。関心をお持ちの方はそちらも参考にしていただきたい。

共感の連鎖と変容

豊岡演劇祭は兵庫県豊岡市を中心に開催される演劇やダンスを中心とした舞台芸術フェスティバルである。フェスティバルディレクターを務める平田は、「対話」「連帯」「進化」の3つのキーワードを掲げ、将来的にアジア最大のフリンジ型の国際フェスティバルへ成長させることを標榜している。多種多様な劇場と宿泊環境のキャパシティの大きさが、国際フェスティバルを実現するための基礎条件を担保しており、豊岡市の主幹産業である観光産業とも連携して企画運営にあたっている。

我が国には、豊岡市のような地方で行われる舞台芸術フェスティバルとして、札幌演劇シーズン（札幌市）、りっかりっか＊フェスタ（那覇市他）、鳥の演劇祭（鳥取市）などが挙げられるが、豊岡演劇祭

のように人口10万人以下の地方自治体で行われるフェスティバルは希少である。それゆえ、実行委員会の主要構成団体である豊岡市は、豊岡演劇祭を人口減少対策や定住人口増加のためのブランドイメージ戦略として地方創生総合戦略の中に位置づけており、都市で行われるフェスティバルとはこれらの点で背景やモチベーションが大きく異なっている。言い換えれば、そこが豊岡演劇祭の独自性であり、豊岡演劇祭を「深さをもった演劇のまちづくり」[1)]のエンジンとしている豊岡市そのものの戦略の独自性にもなっている。この独自性こそが中央省庁や各種メディアから注目を集め評価されている点でもある[2)]。

改めていうまでもなく、地方の活力は、我が国の持続的な発展に欠かすことができないものである。しかしながら地方の衰退は依然として加速度的に進行しており、豊岡市もその例外ではない。穴の空いたバケツのように人口は流出と減少を続けており、このような社会変容によって失われる文化の多様性や、ましてや人口減少といった国家的社会課題に対して、1つのフェスティバルが直接的な解決手段になるなどとはもちろん考えていない。しかしながら、教育なども含めた「深さをもった演劇のまちづくり」の包摂的かつ多層的な取り組みは、個人や社会の小さな変化の誘発と連鎖を生み出すことはできるのではないかと希望を持ち、プロジェクトの推進に尽力している。

考えてみれば、所属する芸術文化観光専門職大学の開学そのものが、この変化の連鎖の延長線上に存在しているともいえる。大学の開学という地域における社会変容は、深さをもった演劇のまちづくりがもたらしたものの1つの証左として考察することもできるのではないだろうか。その社会変容を「進化」と仮定するならば、「対話、連帯、進化」という言葉は、それぞれ個別に存在するのでなく、変化の連鎖の総体として1つの流れを帯びて見えてくる。つまり、対話し、他者と連帯することで、共同体は進化するのである。逆にいえば、対話をしない個人主義の共同体は退化する。わざわざ標榜するまでもなく当たり前の話でもある。

いずれにしても、豊岡演劇祭の社会的役割は、このような対話、連帯、進化の好循環サイクルを実現し、傍流から社会変容を促すことなのではないかと

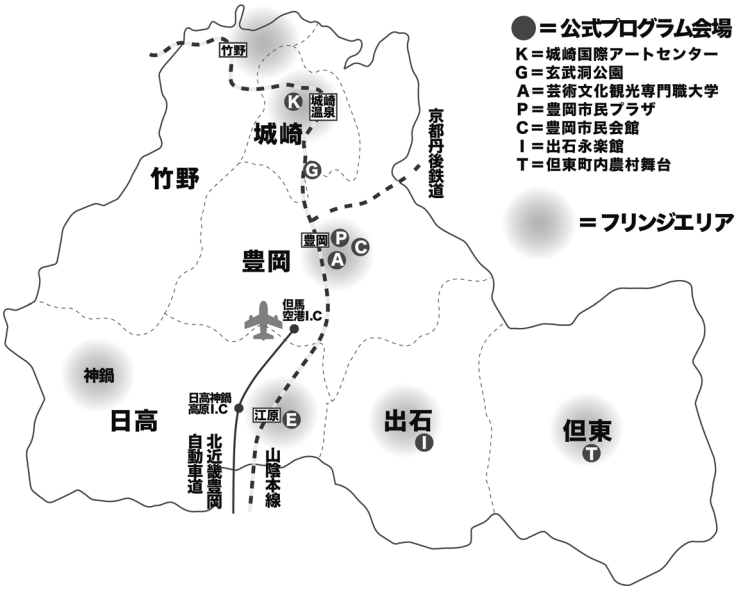

図1　豊岡演劇祭2021の開催予定エリア（豊岡市エリア）

出典：豊岡演劇祭実行委員会 2021年

図2　フリンジプログラムに参加し竹野海岸で上演した
ブルーエゴナク「ザンザカと遊行」© 嶋康太
出典：豊岡演劇祭実行委員会 2020年

図3　フリンジプログラムに参加し神鍋高原で上演した
スペースノットブランク「ラブ・ダイアローグ・ナウ」
出典：豊岡演劇祭実行委員会 2020年

筆者は考えている。それはいわば、ブルデューのいう（負の）文化的再生産への地方からの挑戦といってもいいのかもしれない。

では、その変容とは一体どういう現象なのか、フリンジプログラムの実践の現場を省察することで、もう少しだけ具体的に述べてみたい。

豊岡演劇祭のフリンジプログラムは、公式プログラムが行われる城崎国際アートセンター、出石永楽館、豊岡市民会館などの劇場の周辺（フリンジ）で、時にそこから離れた周辺地域で行われている（図1）。また、劇場の中ではなく特に山陰海岸ジオパークの景観を活かした屋外公演が複数行われているのが特徴でもある（図2、3）。

上図で示した2団体は、公式プログラムの会場から遠く離れた竹野海岸と神鍋高原で上演をしている。特にブルーエゴナクは、竹野町に長期滞在をし、地域に残る歴史や伝承などのリサーチをし、継承される盆踊りを作品に組み込み創作をした。上演の際は地元の竹野盆踊り振興会の方々も共に出演をしている。

このように域外から来訪するアーティストが地域でリサーチをし上演をするのに、豊岡演劇祭コーディネーターは重要な役割を果たしている。瀬戸内国際芸術祭など地域性を重視するフェスティバルが同様に地域にコーディネーターを配置しているのは、コーディネーターによる地域内での媒介者的立ち回りが、地域内でのコミュニケーションを円滑にし、コンフリクト回避において欠かせないと考えているからである。このようにコーディネーターが介在するフリンジの形態は、冒頭紹介した自由登録参加型のエジンバラ・フェスティバル・フリンジやアヴィニヨンOFFと、その点が大きく異なっている。

豊岡市役所環境経済部は、演劇祭の企画・運営をするコーディネーターの人材を募るために演劇祭開催に先駆けて地域おこし協力隊制度を導入した。都市から多数の応募があり、その中から選ばれ着任した隊員たちが、現在、コーディネーターとして演劇祭の運営をし、地域の様々なイベントで活躍している。これらのコーディネーターの活躍の成果もあり、豊岡演劇祭2020終了直後の新規協力隊員募集の際は、コーディネーターの募集枠1名に対し8名の応募があった。また、その他の応募枠も含めた全体の応募状況も前年比5.2倍となり過去最高水準となっている。

豊岡市の地域おこし協力隊は、全国的にも人気が高く、応募プラットフォームを運営するSMOUTは豊岡市の応募状況を以下のように考察している。

> 地域の課題を聞いて、それをそのまま活動メニューとし募集している自治体はあまり上手くいっていない。豊岡の活動メニューは、まちづくりの姿勢や協力隊任期終了後の活動イメージも湧くものになっていて、若い人たちが

魅力的に感じたり、自分の人生に共感できたりするのではないか。それが人気を集めている要因かと思われる[3)]

つまり、課題解決型では人は集まらず、姿勢やイメージへの共感が人を集める要因になっている。この指摘は「役に立つ」ことから「意味がある」ことへの時代の変化を特徴的に表している（山口, 2019）。山口は、著書「ニュータイプの時代」の中で、オールドタイプを、問題が与えられるのを待ち、正解を探す、20世紀後半の数十年の価値観をもつ人々であることと定義し、一方、ニュータイプとは、問題を探し、見出し、提起する人たちであると述べている。ニュータイプは共感力（エンパシー）をソフトスキルとし、課題を形成する。これらのことからも、人手不足を補うような代替可能な役に立つことではなく、意味や代替が不可能なことへの共感がニュータイプを呼びこむ結果を生んでいるともいえるだろう。

豊岡市が掲げる意味に共感してコーディネーターとなった者が、次に、ブルーエゴナクのような他地域のアーティストを呼び込む。来訪したアーティストはその土地固有の意味に共感し、その場所で上演をする。そのような共感の連鎖の総体としてのフェスティバルに共感し、さらに観客が来訪する。フリンジの現場で起きている、あるいは起こそうしているのは端的に言えば、そのような現象である。「対話、連帯、進化」の好循環サイクルとはつまり「共感の連鎖」のことであり、表題に記した変容とはこの連鎖の結果のことを指している。

このような共感の連鎖の波は、実は紹介したフリンジの事例にとどまらず、すでに複数起きている。例えば、民間事業者と新たな金融サービスを開発したり[4)]、公共交通サービスの新たな取り組みを誘発したり[5)]、あるいはこれらの社会的変容に関心をもつ大学のゼミ生たちが都市から来訪してフィールドワークをしたりしている。

本稿を執筆している2022年3月現在、さらに、様々な異なる分野の方々から働きかけが続いており日々企画会議を進めている。本来、そのプロセス自体をここに記したいところではあるが、それは企画実現後の次回に譲ることとしたい。本年9月にはこれらの企画が実現され、より多くの方と共創する演劇祭を実現できるよう尽力し、共感の連鎖が次段階に入ったことを改めて報告したい。

以上、乱文ながら、豊岡演劇祭フリンジにおける共感の連鎖がもたらした変容を振り返り、その連鎖が続く未来に想いを巡らせながら本稿の筆を置く。

注

1）地方創生戦略会議「深さをもった演劇のまちづくり」、豊岡市役所環境経済部大交流課、2021年［https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/018/109/shiryou7.pdf］

2）スポーツ文化ツーリズムアワード2021【文化ツーリズム賞】入賞、2021年［https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/018/349/bunka_tourism.pdf］

3）地域おこし協力隊の状況～12月募集の応募状況と2020年度の総括～、豊岡市役所環境経済部環境経済課、2021年、3–4頁［https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/015/906/3.pdf］

4）豊岡演劇祭応援コイン、豊岡演劇祭webサイト［https://toyooka-theaterfestival.jp/program-event/1696/］

5）豊岡演劇祭の場を使った、スマートコミュニティ作りの施策検証、豊岡スマートコミュニティ推進機構［https://www.toyooka-smart-community.org/post/］豊岡演劇祭の場を使った、スマートコミュニティ作りの施策検証）

参考文献

山口周（2019）『ニュータイプの時代』, p.130